

15	豊川	豊川市立金屋中学校	カワグチ ユウサク 氏名 川 口 祐 作
分科会番号	03b	分科会名	社会科教育（中学校）

研究題目

社会的な視点や方法で追究し、仲間とともによりよい社会を創造する力を育む社会科の授業
ー中学1年「『発展』とは何か ～アジア州からオセアニア州へ～」の実践を通してー

研究要項

1 主題設定の理由

連日、物価やガソリン代の高騰などのニュースが報道され、昨今の世界情勢の変化が私たちの生活に大きな影響を与えている。現代の世界情勢では、貿易政策や移民政策、外交政策などで自国の利益を優先する自国第一主義が台頭し始めている。一方で、グローバル化が進んだ現代では、自国のみの政策での発展は難しく、他国とどのような関係を築いていくべきか、今後の国際関係のあり方を考えることが重要である。第4期教育振興計画では、「2040年以降の社会を見据えた持続可能な社会の創り手の育成」が掲げられ、将来の予測が困難な時代を生き抜くためには、「新しいものを創り出す創造力や、他者と協働しチームで問題を解決する」といった能力が今後一層求められる」と示され、生徒たちには、現代社会の課題を多様な視点で捉えたり、仲間と協働しながら問題を解決したりする姿勢が求められている。

本学級の生徒は、明るく前向きで、教師の話に耳を傾け、指示にしたがって素早く行動に移そうとしたり、仲間と楽しみながら活動に取り組んだりすることができる。地理的分野の学習では、資料の読み取りや仲間との話し合い活動を多く行ってきた。しかし、社会的事象の関連性や背景について考えることが難しかったり、自分の生活とは遠く離れた出来事と捉えてしまったりする生徒も多く見られた。仲間とのかかわり合いを通して、課題を多様な視点で捉えたり、現代社会の課題を自らの生活と結びつけたりして、自分の考えを深められるようになってほしいと考えている。そこで、本研究主題を「社会的な視点や方法で追究し、仲間とともによりよい社会を創造する力を育む社会科の授業」とし、実践を行った。「社会的な視点や方法で追究する」とは、仲間のさまざまな考え方に触れたり、調べた情報を整理したりするなかで、新たな気づきや視点を獲得し、課題を多様な視点で追究することとし、「よりよい社会を創造する力」とは、課題と自分の生活との関連性に気づき、社会とのかかわり方や解決の方法、今後の自己や社会のあり方について主体的に考えを形成する力とした。本単元では、人や貿易、文化などの結びつきが強いアジア州とオセアニア州を1つの大単元とし、単元を貫く課題を「発展とは何か」と設定する。アジア州とオセアニア州の今後の発展の可能性について社会的な視点や方法で追究し、2つの州の関係や課題を多様な視点で捉えることができれば、今後の自己や社会のあり方について主体的に考えを形成することができると思う。

2 研究の目標と方法

(1) めざす生徒像

社会的な視点や方法で追究し、仲間とともによりよい社会を創造しようとする生徒

(2) 研究の仮説

めざす生徒像に迫るために、以下の2つの仮説を立てて、研究を進めることにした。

○仮説Ⅰ

課題追究の方法や仲間との協働学習の場を工夫すれば、社会的事象の関連性に気づいたり、新たな視点を得たりして、課題を多様な視点で追究することができるだろう。

○仮説Ⅱ

生徒自身の生活とつながりを実感できる資料提示や授業の振り返りの方法を工夫すれば、生徒の追究意欲が高まり、よりよい社会のあり方について主体的に考えを形成することができるだろう。

(3) 研究の手だて

① 仮説Ⅰに対する手立て

Ⅰーア 課題追究の方法の工夫

課題を追究する場において、生徒たちに「人口」「資源」「技術」の3つの視点を与える。さらに、3つの視点を使って集めた情報を整理したり、自分や仲間の考えを可視化し、考えを比較したりしやすくするために思考ツール（マトリックス図やポジショニング）を活用する。3つの視点で考察したり、思考ツールを活用したりすることで、社会的事象の関連性や新しい視点に気づき、課題を多様な視点で追究することができるだろう。

I-イ 仲間との協働学習の場の工夫

単元を通して、生徒が仲間との考えの共通点や着眼点のちがいに気づくために、グループ活動を積極的にやる。3つの視点をもとに、ジグソー法を用いて、同じ視点でのエキスパート班や異なる視点でのジグソー班を構成し、話し合い活動を行う。多様な視点からの考えをもとに議論することで、自分の考えと仲間の考えを比較し、生徒たちは視点による考え方の違いや新たな視点の必要性を実感し、課題を多様な視点で追究することができるだろう。

② 仮説Ⅱに対する手立て

II-ア 生徒自身の生活とつながりを実感できる資料提示

世界のできごとを身近な問題として捉え、生徒たちが「伝えたい」「知りたい」という思いがもてるよう、生徒たちの生活とつながりのある資料を用いる。アジア州の国々で製造されたものや昨今の世界情勢にかかわる報道を取り扱うことで、課題への追究意欲を高め、現代社会の問題と自分の生活とのつながりに気づき、よりよい社会のあり方について主体的に考えを形成することができるだろう。

II-イ 授業の振り返りの工夫

毎授業の振り返りとして、気づきや疑問点、参考になった仲間の考えなどを記述させ、仲間の考えをいつでも見られるようにする。生徒の考えを可視化し、共有することで、自分と仲間との考えの比較が容易になる。仲間の考えに共感したり、新たな疑問が生まれたりして、考えの深まりを実感し、課題への追究意欲を高め、よりよい社会のあり方について主体的に考えを形成することができるだろう。

3 研究の計画

(1) 検証の方法

抽出生徒Aの変容を追うことにより、仮説における手だての有効性を検証することにした。抽出生徒Aの実態と本実践における願いは次の通りである。

生徒Aは、社会科の学習に対してすすんで学習に取り組むことができる。学習のポイントや重要な語句を見つけたり、自分なりの考えをもったりすることはできるが、学習内容を関連させるのが苦手で、一面的な視点での考えにとどまってしまう。本研究の実践を通して、新たな視点や現代社会の問題と自分の生活とのつながりを、仲間と関わりあいのなかで気づき、多様な視点をもって、今後の自己や社会のあり方について主体的に考えを形成することができるようになってほしいと考えた。

(2) 単元指導計画（12時間完了）

学習の流れ	主な手立て
単元を貫く課題 「発展」とは何か。	
○ 地図や資料からアジア州の特徴について考える。	
アジア州とはどのような地域だろう①	
- 世界の人口の約 60% がアジア州に集中している。 - 自然が豊かで地域ごとに環境が異なる。 - 身の回りはアジア諸国で作られた工業製品がある。 - 日本や中国、韓国など成長している国が多い。	自分の生活とのつながりを想像しやすするために、アジア州で生まれた身近な製品を紹介する。
○ 各地域の資料からアジア諸国の発展について考える。	
どのようにアジア諸国は発展していったのだろうか②③④	
【東アジア】 - 中国は外国企業を受け入れ、技術を取り入れながら工業化を進めている。 - 韓国などのアジア NIES はハイテク産業が成長して、世界各国に輸出されている。 【東南アジア・南アジア】 - ASEAN 諸国は資金が安く、多くの国の企業が進出している。 - インドは数学や英語の教育水準が高く、ICT 産業が盛ん。 【西アジア・中央アジア】 - 石油や天然ガス、レアメタルなどの資源が豊富で、世界各国に輸出されている。	- 産業の変化を理解するために、輸出先のグラフや都市の写真から地域の特徴を読み取り、班で考えを共有する活動を行う。 - 各地域の発展の共通点や関連に気づくために、白地図に情報を整理する。
○ アジア諸国の発展における共通点や要因を考える。	
アジア諸国の急速な発展を支えているものは何だろうか⑤	
- アジア州には人口が多く、安く豊富な労働力がある。 - 工業化には労働力と資源が必要。どこから資源を確保しているのか。→ 日本も中国もオーストラリアからの輸入が多い。 - 輸出入や企業の受け入れなど、外国から技術を取り入れている。	アジア諸国の発展の要因を確認し、生徒の考えを「人口」「資源」「技術」の 3 つの視点に分類する。
○ 資料からアジア諸国の抱える今後の課題について考える。	
このままアジア諸国は発展していけるのだろうか⑥	
《できる》 - アジアの製品は世界中に広がっているから、このままでも発展していける。 - 人口が急増しているから、労働力は豊富にある。 - 高い技術をもつ国が多いから、資源があれば発展できる。	《できない》 - エネルギーの獲得や外国企業の進出などを他の地域に依存している。 - エネルギーは発展するために必要不可欠。日本のように輸入で安定した資源を得るのは難しいのではない。
○ 資料からアジア州とオセアニア州の関係について考える。	
アジア州とオセアニア州には、どのようなつながりがあるのだろうか⑦	
《貿易のつながり》 - 輸出相手がヨーロッパ州からアジア州に変化している。 - アジア州へ農作物や鉱産資源を多く輸出している。 - マクドナルドもオーストラリア産の牛肉を使用している。	アジア州とオセアニア州との経済面や文化面など様々なつながりに気づくために、統計資料や地図を用いた活動を行う。

《人々のつながり》 - チェーンタウンができたり、第二言語がアジア諸国の言語だったり、アジア州からの人を受け入れようとしている。 - アジア州から多くの留学生がオセアニア州へ行っている。 ○ 地図や資料からオーストラリアの特徴について調べる。 オーストラリアはどのような地域だろう⑧⑨ 【人口】 - アジア州とは季節が逆で、中央部には砂漠がある。温暖な沿岸部に人口が集中している。 - 先住民がいて、日本とは異なる文化がある。 - 海外からの留学生やアジア州からの移民も多く来ている。 【資源】 - 多くの鉱産資源（鉄鉱石、石炭、ボーキサイトなど）が採掘ことができ、重要な輸出品になっている。 【技術】 - アジアから多くの移民が来て、外国の文化も広がっている。 - 鉱業やICT産業が進んでいる。 ○ 3つの視点でオーストラリアの課題について考える。 オーストラリアはどのような課題をもっているのだろうか⑩ ○ オーストラリアの今後の発展について議論する。 これからはオーストラリアは発展していけるのだろうか⑪（本時） 《できる》 - 海外からの移民が多く、労働力は増加している。 - アジア諸国が鉱産資源を必要としているから、まだ発展できると思う。 - 工業化を進めて輸入に頼った自動車を国内で生産すればよい。 《できない》 - 脱炭素化をめざして石炭の需要が減ってきている。 - 石油を輸入に頼っているから、今の時代では発展は厳しくなるのではない。 - 中国と対立した時もあり、アジアとの関係を維持する必要がある。 ○ 2つの州の未来について考える。 アジア州とオセアニア州がともに発展していくためにはどのようなことが大切だろうか⑫ - 多文化社会のように、互いの国の状況や文化を知り、よい関係を築く必要がある。 - 自国のことや相手のことの両方をバランスよく考えていくことが大切ではないか。	調べ学習をしたり、班で話し合いをしたりして、考えを共有する。 ○ オーストラリアの地域的特色を多面的に捉えるために生徒に3つの視点（「人口」「資源」「技術」）で、調べ学習を行う。 【手だてⅠ-ア】 自信をもって自分の考えを発表したり、考えを深めたりするために、ジグソー法を用いてエキスパート班やジグソー班を構成する。 【手だてⅠ-イ】 ○ アジア州との共通点や相違点、関係性を考察するために、個人からグループ、全体へと学習形態を変容させ、話し合い活動を行う。 ○ 生徒の考えを可視化するために、ポジショニングを活用する。 【手だてⅠ-ア】 ○ 生徒が課題を多角的に考察できるよう、「オーストラリア」「アジア諸国」の立場を与え、地域間のつながりや各発展の在り方について迫る。 ○ 「相互依存」「相互理解」についての考えを深めるために、振り返りを互いに共有する場を設ける。
---	---

4 研究の実際と考察

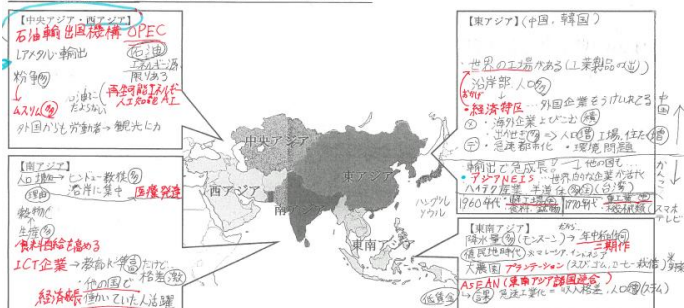
(1) 仲間との調べ学習や協働学習を通して、アジア州の発展における共通点を見つける生徒A

第1時の導入時に、「世界各地の人々の生活と環境」での学習内容を確認した。生徒たちは、「雨で取れる食べ物が変わる。」「自然にあるもので家を作っている。」と答え、人々の生活が自然環境と大きく関係することは理解できていた。その一方で、教師が「難しかったことはある?」と問いかけると、「見たことがないものが多かった。」という発言があり、多くの生徒が共感する姿勢を見せた。そこで、アジア州と自分の生活とのつながりを実感させるために、iPhoneの写真を見せ、どこで作られたものなのかを話し合わせた【IIーア】。写真を見た生徒たちは、「iPhoneってアメリカの会社じゃないの?」と予想を立てていた。立てた予想をもとに、教科書や資料集を使って、アジア州の自然環境や人口などについてグループで調べ学習をするよう指示した【Iーイ】。iPhoneの製造工場を調べていた生徒Aは、中国に多くの工場が集中していることを見つけていた。「なぜ中国だと思った?」と生徒Aのグループに問うと、生徒Aは「人口が多いから?」と答え、産業と人口に関係があるとの考えをもって、仲間と調べ学習を進めていた。生徒Aの振り返りには、身近な製品がアジア州の国々で生産されていることを知り、アジア州の国々への追究意欲が高まっていることが読み取れる(資料1)。

アジア州では身の回りのものが多く作られていることを知りました。特にアジア州は人口が多く、季節風によって、降水量の多いところに集中していることもわかりました。どのように発展したのかもっと調べたいと思いました。

【資料1】第1時の生徒Aの振り返り

どのようにアジア州は急速に発展していったのだろう



【資料2】第4時を終えた後の生徒Aのワークシート

第2時から第4時にかけて、学習課題を「どのようにアジア諸国は発展していったのだろう。」と設定し、南アジア、東アジア、東南アジア、西・中央アジアの4つの地域の産業や課題について調べる活動を行った。導入時に、前時の振り返りを共有する時間を設け、生徒Aは、「他にはどのような企業があるのか知りたい。」という自分と似た考えをもつ生徒の振り返りを見つけ、その生徒とグループを組んで調べ学習を始めた【IIーイ】。調べ学習を進める際は、調べた情報が比較できるよう、白地図に整理するよう指示した。生徒Aのワークシートと振り返り(資料2・3)から、各地域を比較するなかで、工業化が急速に進んだ背景には、「外国の技術の受け入れ」と「安い労働力」という共通点に気づくことができたことがわかる。

アジア州は人件費が安く、外国の工場を受け入れて、多くの工業製品を生産できるようになりました。5つの地域の特徴や他の国との関わりを探することで共通点を見つけられ、アジア州全体がどのように発展したのか考えることができました。

【資料3】第4時の生徒Aの振り返り



【資料4】第5時の板書記録

第5時では、「アジア諸国の急速な発展を支えているものは何だろう。」という学習課題のもと、グループで発展の要因について話し合った【Iーイ】。事前に指名した4名の生徒に各地域の特色を板書させ(資料4)、教師から「各地域の共通点はあるかな?」と生徒たちへ問いかけた。資料5は生徒Aたちのグループの会話である。生徒Aは「資源」という新たな視点で捉えようとしており、多くの資源を輸入している日本と関連させて、「アジア諸国も製品を生産するために資源を輸入する必要があるのでは」と考え、「どこから資源を輸入しているのか。」という新たな疑問を抱いていることが読み取れる。グループでの話し合いの後、学級全体で発展の要因について確認し、生徒たちの考えを「人口」「資源」「技術」に分類した後、今後の追究の視点として位置付けた【Iーア】。

- 生徒A: 経済特区もASEANも外国企業を受け入れたって書いてあるよ。
 生徒B: うまく外国を利用しているんだね。
 生徒C: 製品を作るためには、エネルギーが必要じゃない? 電気がないと…。
 教師: いいことに気づいたね。黒板を見て他に気づくことはないかな?
 生徒C: 西アジアや東南アジアは石油や石炭が取れるって書いてある。
 生徒B: 資源? 中国でも取れるのかな?
 生徒A: どこからか輸入されているんじゃない? 日本みたいに。
 生徒B: 資源も企業も外国からもらっているってこと?

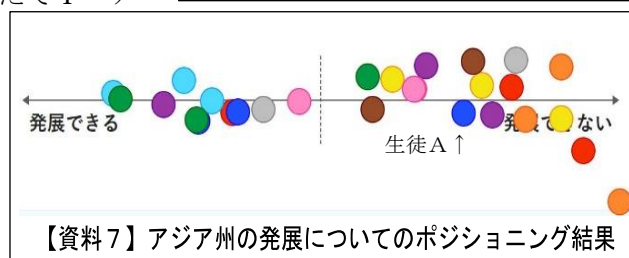
【資料5】生徒Aのグループでの会話

(2) 3つの視点で2つの州の特徴をつかむ生徒A

第6時では、アジア諸国の発展の可否について考察する活動を行った。生徒が考えを整理しやすくするために、「人口」「資源」「技術」の3つの視点をもとにマトリックス図を作成し【Iーア】、生徒は個人でそれぞれの視点での発展の可否について考えた。個人で学習した後、3人グループで話し合いを行い、考えの広がりを実感できるように、仲間の意見を赤色で記入するよう指示した【Iーイ】。生徒Aは、仲間との話し合いを通して、各視点での考えをより広げることができたことが読み取れる(資料6)。その後、アジア諸国の発展の可否を総合的に判断する時間を設けた。生徒たちは個人で考えた後、ポジショニングを使って全体で考えを共有した【手だてIーア・イ】。資料7を見ると、アジア州の発展については、「できない」がやや多い結果となった。「発展できる」と考えた生徒の意見として、「今後も人口は増加傾向にあるから。」「人工知能や再生可能エネルギーなどの技術が進歩していくから。」といったものが挙がった。その一方で、「発展できない」と答えた生徒の多くが、少子高齢化による労働人口の減少と資源の枯渇による産業の衰退を理由に挙げ、生徒Aも「資源には限りがあり、このまま減り続けたら発展は難しいと思う。」と考えを述べた。教師から「資源を輸入すれば、発展できるの?」と問いかけると、多くの生徒が頷き、生徒Aや学級にとって資源の確保が大きな問題となっているようだった。そこで、地図帳の資料を使って、アジア諸国への資源の輸出入の流れを確認し、オーストラリアから多くの石炭や鉄鉱石を輸入していることに気づいた。生徒Aは、全体での話し合いを通して、自分とは異なる仲間の考えに共感するとともに、輸入相手との関係が重要だと、他国との関係に考えを広げていることがわかる(資料8)。

	できる	できない
人口	- 医療発展 - 人件費が安く豊富な労働力 - 少子化	- 深刻な環境問題 - 急速な都市化 - 少子高齢化 - 収入の格差 - 食料やエネルギー資源の確保がむずかしい
資源	- 再生可能エネルギー - 人工知能(AI) - アランテーション(スリムスラン)	- 資源に限りがある - 石油が枯渇している
技術	- ハイテク産業発展 - AIの活用	産業の衰退

【資料6】生徒Aが作成したマトリックス図



【資料7】アジア州の発展についてのポジショニング結果

資源がないならほかの国から輸入したらいいという意見と、人が足りないのならば人工知能を使えばいいという意見は考えていなかったもので、確かにと思いました。でも輸出してくれるところとトラブルが起きたら資源がなくなってしまうし、それこそ依存になってしまうので相手との関係が大切だと思いました。

【資料8】第6時の生徒Aの振り返り

第7時の導入時に、教師がマクドナルドのハンバーガーを提示した【IIーア】。オーストラリアを中心とするオセアニア州とアジア州のつながりを実感させるためである。その後、資料を配付して、オーストラリアとアジア州の関係についてグループで調べ学習を行った【Iーイ】。資料から、生徒たちは貿易相手がヨーロッパ州から中国や日本などのアジア諸国に変化していることや観光や留学のために多くの人々がオーストラリアを訪れていることなどを読み取り、アジア州とオーストラリアには、貿易や人々による強いつながりがあることを理解することができた。話し合い後の生徒Aの振り返りを見ると、オーストラリアがアジア州の発展を支えていることに気づいたことがわかる(資料9)。

アジア州がこんなにも発展していた理由が、オーストラリアから多くのものを輸入しているからだと思いました。資源の輸出と輸入の関係以外にも留学生や移民、観光客が行き来する関係だということがわかりました。

【資料9】第7時の生徒Aの振り返り

第8時では、生徒たちにアジア州の学習で得た追究の視点である「人口」「資源」「技術」の3つの視点のいずれかを与え、オーストラリアの地域的特色について調べさせた【Iーア】。その後、生徒たちが自信をもってその後の活動に臨めるように、同じ視点の3人でエキスパート班を作り、話し合いを行った【Iーイ】。生徒Aには「資源」の視点を与えた。エキスパート活動において、生徒Aの班では、「オーストラリアは石炭や鉄鉱石をアジア州の国々に多く輸出している。」「資源の輸出が大きな産業になっているけど、石炭がなくなったら困るから、脱炭素社会で石炭に頼らない社会づくりを目ざしている。」「石炭や鉄鉱石は採れるけど、石油はあまりとれないみたい。」という意見が出ていた。生徒Aは話し合い活動のなかで、オーストラリアにとって、資源の輸出が重要な産業であることに気づく一方で、オーストラリアの産業の課題に気づき、核心に迫ろうとしていた。

(3) 多様な視点で課題を捉え、今後の発展について真剣に考える生徒A

第9時では、異なる視点をもった3人でジグソー班を作った【Iーイ】。ジグソー班では、エキスパート班で話し合った内容をもとに自分の考えを発表した(資料10)。生徒Aは、「資源」の視点からオーストラリアの現状や課題を伝えた。「人口」や「技術」について調べていた生徒らから、30代の労働者が移民として移り住み、チャイナタウンなどの多文化社会を形成していること、ICT産業が盛んで、インドと深いかかわりのあることを聞き、オーストラリアが資源の輸出だけでなく、多様な産業に力を入れていることを知った。また、生徒Aのワークシートや振り返りか

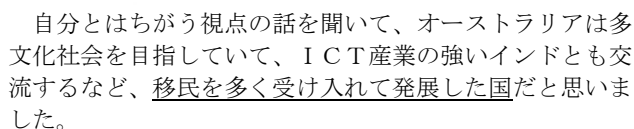


【資料10】ジグソー班で話し合う生徒A

第10時では、「オーストラリアがインド以外の国とどのような関係を築いているのか知りたい。」という他の生徒の振り返りを紹介して授業を始めた【II-イ】。この振り返りに対し、生徒Aは「日本とは貿易しているから仲がよいのかな?」と疑問を口にし、学級全体が問題意識をもった。そこで教師が「豪中、対立深まる コロナ発生起源調査巡り中国『経済報復』『渡航自粛』」という記事を見せ、「アジアでもうまくいっている国もあればそうでない国もある。オーストラリアは今後も発展していけるの?」と問い

第11時では、「これからオーストラリアは発展していけるのだろうか。」という学習課題のもと、考えが入力されたポジショニング（資料13）を使って、全体で話し合いを行った。ポジショニングでは、「発展できる」が多い結果となり、発展すると述べた生徒の考えとして、「人口と資源は十分にあるから、アジアの国から多くの技術を学べば今後も成長できる。」「アジア州と違って、若い人たちがやってくるから、少子高齢化が進まない。」といったものが挙がり、アジア諸国の課題と比較しながら考える生徒が多く見られた。生徒Aも、労働人口の増加や豊富な資源など、発展にプラスの要因が多いと考え、「発展できる」という立場を示した。一方で、発展できないと考えた生徒から、「中国との関係が悪い。中国は最大の貿易相手で4分の1を占めていて、留学生の35.8%が中国から来ている。チャイナタウンもあり、中国は重要な相手だと思う。」「石炭の輸出が多いけど、脱炭素社会が完成したら、石炭は必要なくなってしまう。輸出できなくなったらオーストラリアに

という意見が出た。そこで、令和7年10月下旬に報道された「中豪首相が会談、関係安定化へ意欲 緊張や対立でも」という記事を紹介した【Ⅱーア】。生徒たちは、遠い過去ではなく、現在も自国の発展のために協力関係を築こうとしていることに気づき、驚いた様子が見られた。生徒Aの振り返りには、「国が発展していくためには資源、



	できる	できない
人口	人口増加改善 若者が多い 文化芸術 観光客の増加	人材不足 ヨーロッパから老人が来る 人口密度が少なくていい (EU > 2000 / km ² 147 / km ²)
資源	鉄鉱石 豊富な資源 階級社会	建物が少ない (乾燥している)
技術	年々増え率で8.2% 教育レベル産業 ITの開発 ICT, IT産業	トヨタがすごい 高い価格の高性能 中国との対立 自動車メーカー少ない

生徒A

発展できる

発展できない

話し合いの後、個人で考えを再構築する時間を設け、「口」「資源」の視点から、異なる反対の考えが出たことも仲間の発言を聞き、「確かに。」と共感する姿勢を目的のポジショニングの結果である。話し合いを通して話を聞くと、「アジアの国に頼っている状態だから、いかなくなると思った。」と話した。この結果を受けて「なくていいの？」と問うと、多くの生徒が首を横に振り「すれば発展していけるのかな。」と問いかけた。すなわち、「協力したり、助け合ったりすることが大切。」

【資料 15】 第 11 時の生徒 A の振り返り

人口、技術も成長しなきゃダメだけど、助け合いも発展に大切なことの一つだと思った。」という記述が見られ、生徒Aが「協力」という新たな視点で課題を追究していることがわかる（資料15）。

第12時の導入時に、前時の振り返りを全体で共有し、「人口」「資源」「技術」に加えて「協力」という新たな視点が出てきたことを再確認した【Ⅱーイ】。その後、『発展』とは何か。」という単元を貫く課題についてのまとめを行った。生徒たちのまとめには、「発展は自分たちの生活がよくなることだけではなくて、互いに協力し合う関係を作ることだと思う。」「世界各国はSDGsなどでも協力していて、現状を知り、一人一人がしっかりと理解しないといけないと思いました。」といった記述が見られた。資料16は、生徒Aが記入した単元のまとめである。生徒Aは、発展には「協力」が必要だと考える一方で、「協力」がないと世界は衰退してしまうと考え、現代社会の課題を世界全体で解決していきたいと思いを強くしたことが読み取れる。単元を通して、仲間と関わり合いながら、多様な視点で課題を追究したことで、生徒Aは国際社会の課題を自分のこととして捉え、よりよい社会のあり方について自分なりの考えを形成する姿が見られた。このような姿は、よりよい社会を創造する力の基盤になると考える。

私は今世界で起きている問題や、国同士の関係の良し悪しなどを知り、もっと国同士の関係を深めると、世界は発展できるのではないかと思います。世界の国々は、他の国と貿易して足りないものを補い合ったり、ほかの国に企業が進出して利益などを出して発展していていると感じるので、もしほかの国との関係が激化して戦争が起こったり、貿易ができなくなると大きな損失が出たり、発展ができなくなってしまうと、足りないものが出て、国がどんどん良くない方向に進んでいってしまうと思いました。日本もだけれど、すべての国が関係を深め、協力できる世界でありたいです。

【資料16】生徒Aの単元のまとめ

5 研究の成果と今後の課題

（1）仮説Ⅰに対する手だて

① 課題追究の方法の工夫

課題追究の場面で、「人口」「資源」「技術」の3つの視点をもとに、思考ツールを活用して考えを整理・表現し、仲間と考えを共有する活動を行った。生徒Aは、第11時の振り返りに、「ポジショニングを見て、みんなの考えがわかりやすくて、友達の意見を聞くと、様々な視点から見られるからいいなと思いました。」と記述した。以上のことから、生徒たちに3つの視点を与えたり、思考ツールを使用して考えを共有したりしたことで、社会的事象の関連性や新しい視点に気づくことができ、多様な視点で課題を追究する手だてとして有効であったといえる。

② 仲間との協働学習の場の工夫

生徒Aは、第9時の振り返りに、「自分とはちがう視点の話を聞いて、オーストラリアは多文化社会を目指していて、ICT産業の強いインドとも交流するなど、移民を多く受け入れて発展した国だと思いました。」と記述した。第11時には、生徒Aは異なる考えを聞き、「アジアの国に頼っている状態だから、関係が悪くなったら貿易も交流もいろんなことがうまくいかなくなると思った。」と発言し、自分の考えを変えた。以上のことから、協働学習の場を工夫したことで、視点による考え方の違いや新たな視点の必要性を実感することができ、多様な視点で課題を追究する手だてとして有効であったといえる。

（2）仮説Ⅱに対する手だて

① 生徒自身の生活とつながりを実感できる資料提示

iPhoneやハンバーガーなどの写真や昨今の国際関係を報じた記事から、国や地域間のつながりや他国との良好な関係作りについて考察した。生徒Aは第1時の振り返りに、「アジア州では身の回りのものが多く作られていることを知りました。どのように発展したのかもっと調べたいと思いました。」と記述し、単元のまとめには「すべての国が関係を深め、協力できる世界でありたいです。」と記述した。以上のことから、学習内容と自分の生活とのつながりを実感させたことで、生徒たちの追究意欲を高め、現代社会の課題と自分の生活とのつながりに気づくことができ、よりよい社会のあり方について主体的に考えを形成する手だてとして有効であったといえる。

② 授業の振り返りの方法の工夫

第2時に、生徒Aは振り返りの中から企業について調べようとする生徒を見つけ、その生徒とグループを組んで調べ学習を行った。第10時では、「オーストラリアがインド以外の国とどのような関係を築いているのか知りたい。」という他の生徒の振り返りに対して、生徒Aは「日本とは貿易しているから仲がいいのかな？」という疑問をもった。以上のことから、振り返りをいつでも見られるようにしたことで、仲間との考えに共感したり、新たな疑問が生まれたりして、課題への追究意欲を高め、よりよい社会のあり方について主体的に考えを形成する手だてとして有効であったといえる。

6 今後の課題

本研究を通して、考えを伝え合う場をより多く設けることや自分のこととして捉えることが重要であると感じた。本単元では、くり返し話し合いを行ったことで、課題への視点が養われ、多くの生徒の考えが変容し、考えをより具体的に表現することができた。今後も協働学習の方法について追究し、生徒が多様な視点で課題を追究する力を養っていきたい。また、自分とどのようなつながりがあり、自分の将来にどんな影響を及ぼすのか想像させながら、生徒が「学びたい」と思える、思考が止まらない授業を追究していきたい。